

## 東南アジア主要銀行の経営効率の変化と外資系銀行の特徴

奥田英信<sup>1</sup>（一橋大学）

竹康至（一橋大学大学院）

### 要旨

新興経済市場の銀行市場は、各国の銀行市場の自由化と対外開放が進み、2000年代以降大きな変化を遂げつつある。更に近年の特徴として、金融部門の対外開放を背景として、多国籍銀行の進出が各地域で活発に見られるようになってきている。多国籍銀行の進出は、新興市場地域の銀行部門に大きな変化を与えている。東南アジア諸国は従来多国籍銀行の進出が遅れていたが、アジア危機後の経済・金融改革によって、各国でそのプレゼンスが大幅に増してきている。今後もFTAあるいはTPP交渉を通じて一層の進出が進むものと予想されている。受入国銀行部門の効率を改善し長期的な経済発展にも好影響をもたらすものとして期待されている。

本稿では、2000年代中期以降の東南アジア諸国の主要銀行の経営変化について、マイクロデータを利用したDEA(Data Envelopment Analysis)を行う。分析対象はインドネシア、韓国、マレーシア、フィリピン、台湾、タイ、ベトナムの7カ国の主要銀行で、2004-2010年期のBankscopeデータベースを使用する。第2節では各国の主要銀行について経営指標を使った比較検討を行い、第3節と第4節ではDEAを利用して各国銀行の効率性および技術変化、外資系銀行と地場銀行の違いを計測した。第5節では、本稿で明らかになった東南アジア諸国の2000年代の銀行経営の特徴について若干の考察を試みた。

本稿の計測結果によれば、アジア諸国の銀行は国毎に経営形態が多様であるが、概して経営効率は優良であり、リーマンショック後の経営環境の下でも頑健な経営を維持してきた。外資系銀行の経営については、外資系に共通の経営特性があるというより個別行の経営方針に依存する部分が多いが、新市場に参入して時間が経つに連れて総要素生産性が次第に改善して行く傾向が観察された。

---

<sup>1</sup> E-mail: okuda@econ.hit-u.ac.jp